宮城・中野高柳（なかのたかやなぎ）遺跡

1　所在地　宮城県仙台市宮城野区中野字高柳

2　調査期間　二〇〇一年（平13）四月～一一月

3　発掘機関　宮城県教育委員会

4　調査担当者　村田晃一・相原淳一・天野順陽・千葉直樹

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　平安時代～江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

中野高柳遺跡は仙台平野の北部を流れる七北田川左岸、標高三～四mの自然堤防上に立地する。遺跡は南北に細長く、最も広い部分で南北四〇〇m東西一五〇mあり、面積は約五〇〇〇〇m²ある。仙台港背後地土地区画整理事業に伴い、一九九四年から宮城県教育委員会と仙台市教育委員会によって発掘調査が行なわれ、遺跡北半部西側では幅三mの溝で囲まれた室町時代から戦国時代の屋敷跡、南半部では鎌倉時代の屋敷跡などが確認されている。また、これらの下層から、平安時代の畑跡・水田跡・河川跡などが検出されている。

（仙　台）

二〇〇一年は遺跡北半部西側で約六一〇〇m²、南半部で約七二〇m²を調査した。これまでの調査地を合わせると遺跡全体の三分の一（約一八〇〇〇m²）を調査したことになる。

木簡は、北半部の湿地跡から一二世紀前半の土器（かわらけ）とともに出土した。なお、南部の湿地跡からは一三世紀の遺物とともに漆紙文書が一点出土している。

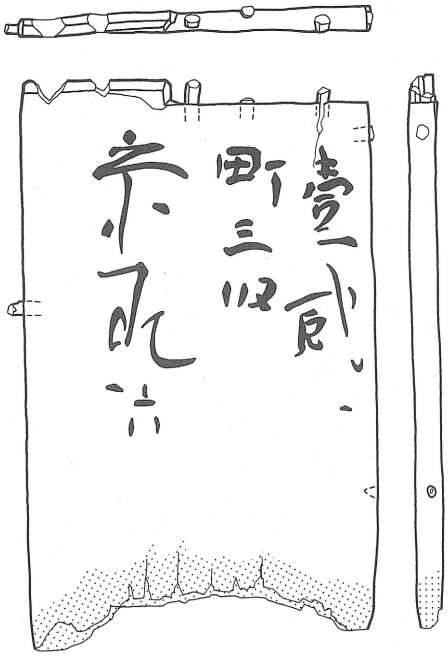
湿地跡は平安時代の河川跡の上に形成されている。河川跡は遺跡北半部の中央から南部の東縁を南に流れ、南端付近で西に向きを変えている。河川敷を含めた川幅は三〇mを超えるとみられる。北半部と南部の一部で調査を行なったところ、堆積土は黒色粘土を主体とし植物遺体を多く含む上層、砂質シルトを主体とする中層、砂を主体とする下層に大別できた。北半部の上層から一二世紀、南部の上層からは一三世紀の土器・陶磁器がまとまって出土したことから、河川は遅くとも一二世紀初頭までには埋没し、その後湿地化したと考えられる。湿地はゴミ捨て場となっており、焼土や灰・炭化物などとともに、土器・陶磁器・漆製品・木製品・動物遺体・植物遺体が多く出土している。

北半部の湿地跡から一二世紀、南部の湿地跡から一三世紀を中心

とする遺物がまとまって出土したことは、宮城県内において発掘調査例の少ないこの時期の生活を復元する上で貴重な発見になった。特に北半部の湿地跡から出土した一二世紀の土器・陶磁器は、かわらけ（ロクロ＋手づくね）、常滑・渥美産陶器、白磁であり、この組合せは同時期の東北における政治的・宗教的・経済的中心地であった平泉において特徴的にみられる。こうした土器・陶磁器類の「平泉型セット」は、東北地方の中でも限られた遺跡にのみ認められる。遺物を含むゴミの廃棄行為は、湿地の東側から行なわれている。したがって、遺跡北半部の湿地東側には一二世紀に奥州藤原氏と密接な関係にあった人々の居住施設が存在したと考えられる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「壱弐□
　　町三段
　　〔未承カ〕
　　□□□　　(152)×95×7　065

上端に面取りがあり、上端と両側面には木釘が打たれていることから何らかの部材の断片とみられる。下端は焼損している。面積を示す内容が書かれており、土地に関する文書と考えられる。

（1～7　村田晃一、8　吉野　武）